

西来寺報

二〇一九年 夏
第三十四号

お念珠

私たち仏教徒にとって欠かせない法具に念珠があります。数珠（じゆず、ずず）とも言いますが、法事・仏事の際に、仏様を礼拝する際に合掌したときに手にかけます。念珠はもともと古代インドのバラモン教で用いられた道具が原型とされていています。それが仏教に用いられ、後に中国に伝わり、そして仏教伝来とともに



中央に念珠を持っている仏様の姿がある インドにて住職撮影

に飛鳥時代に日本に伝わりました。私がインド旅行をしたとき5世紀〜6世紀に作られたアジャンター石窟寺院の壁画に念珠をもっている仏様の絵がありましたので、仏具としてはかなり古いものだと思います。さて、念珠の球数ですが108を基本として（煩惱の数とされる）半数の54珠、3分の1の36珠、4分の1の27珠、6分の1の18珠がありますが、珠の大きさによって必ずしも数に限りがありません。僧侶用の念珠は本装束、半装束など108珠のものが多くありますが、一般の門徒さんのように略念珠もあります。念珠の珠の形は丸珠、切籠型、ミカン型などがあります。また、材質は、水晶、菩提樹の実、瑪瑙、木を削ったもの、プラスチックなど色々あります。またプレスレットのように左手に付ける小念珠もあります。男性用、女性用の念珠がありますが、もつときは

左手にもち、合掌のときは、両手を念珠の輪に通し房を下にします、女性用の念珠に二輪の念珠があります。が、この時には房を左手より脇に垂らします。尚、浄土真宗では念仏の数を数えるために爪繰りすることがありません。お一人お一人がご自分の念珠をお持ちいただき、糸が切れてもつなぎ合わせ、大切にお使いいただきたいと思います。法事するときにも忘れずにお持ち下さい。

住職

2019年のお盆日程

新盆 7月8日

新盆経。西来寺では昨年の6月から今年の5月に亡くなられた方の御家族を集めて法要をします。（該当の方にはご案内差し上げています）

お盆 7月13日〜7月16日
東京地方、横須賀市中心部。

旧盆 8月13日〜8月16日
月遅れのお盆。葉山、鎌倉方面
全国的にはこちらの方が多し。

※本堂の受付は9時〜17時です

合同帰敬式 令和元年9月上旬にやります！

本年9月に西来寺での合同帰敬式を予定しています。

帰敬式は仏様の教えを依りどころとして生きる者となることを誓う儀式です。住職と相談しながら生前に法名をいただけます。法名は亡くなった時につける名前だと思われがちですが、本来は帰敬式を受式して生前にいただくものです。

すでに申し込みをしている方々は案内書等を送付させていただきます。申し込みをされていて、案内書が来ない場合などございましたら、お手数ですがご連絡下さい。また新たにご希望の方は、お電話等で申し込んでいただければと思います。参加費用はお一人一万円です。



2015年6月8日 境内の菩提樹

親子二代で書店と玩具店を 経営している門徒さん

昭和二十二年創業の「三雄堂書店」と昭和四十三年に開店した「おもちゃの王様」は、衣笠通り商店街にあります。一階の書店を次女が、二階の玩具店は三女がそれぞれ後を継いで、地域のお客様のお役にたつ様頑張っています。

『西来寺誌』の編集長をしてくださった平岡増雄さんは昭和二年生まれ、今年で九十一歳。横須賀生まれで、中学生のころに横須賀で戦争を経験されました。終戦の玉音放送を聞いたのは、学徒動員で派遣されていた職場のラジオだったそうです。

「聖徳寺坂（横須賀上町）の途中にある小さな小屋に、憲兵二人、課長一人、女の子二人と私たち男子学



生三人の計八人。そこで郵便物の検閲をしていました。南方への郵便物のほとんどは横須賀局気付で、私たちは、戦地で戦っている兵士に送る家族や友人たちの手紙の封を開けて読み、戦争に反対する様な言葉などがあれば、その部分をハサミで切り落とすのです。悪いことです。罪悪感がありました。けどお国のためと説得され、与えられた仕事に取り組みました。そうして働いている職場のラジオで終戦を知り、やっと心の重荷を下ろすことができました」

戦後、平岡さんは家族を支えるために、買い付けた魚を横浜や東京へ売りに行ったりして、独自で商人として働きはじめます。「人に命令されて、嫌なことをやらされるのは、もうコリゴリですから、どうしても勤め人にはなりたくなかったんです」と平岡さん。そうして昭和二十二年、当時衣笠駅前にあった俗にいう闇市と呼ばれるマーケットの一角を借りて、鉛や絵本を売ったのが本屋「三雄堂書店」の始まりです。その闇市も不法建築のため取り壊さ

れてしまいました。ちょうどその時、裏の土地を運よく借りられるようになり、同級生の友達が建築業に勤務していたので古材、古トタンで店を建ててくれました。

「私の人生はみんな、人の縁に支えられています」と平岡さんは語ってくださいました。

昭和三十三年、当時は不治の病とも言われていた結核で入院。回復に向かっているとされていた矢先、主治医から手術を宣告されました。入院中『保健同人』という医療系の本を毎号読んでいた平岡さんは、看護婦さんからレントゲン写真を借り、病院をぬけだし、御茶ノ水にある結核専門の病院の院長に会いに行きました。「これは手術しないで治りますね」と院長に診立ててもらい、数日後さらなる確証を得たいと副院長にも診てもらったそうです。そのおかげで手術を免れ、薬の投与で治しました。「手術をしていたらどうなっていたか分からない。入院の一年間、家内にはほんとうに苦勞をかけた」と、当時を振り返ります。

平岡さんの言う「人の縁」は、「嫌なことは嫌だ」「やると決めたらとことんやる」平岡さんご自身の信念に基づき行動力と人に対する優しきがあるからこそなのだろうと感じさせていただきました。

おもちゃの王様では、創業時から「プラモデルコンクール」をおこなっています。今回は第六十八回。みなさんも「王様賞」を狙ってチャレンジしてみたいかがでしょうか。入賞作品は一年間、お店に飾ってもらえますよ！ 受付は八月中旬です。

三雄堂書店

電話 ○四六・八五〇・六六五〇

おもちゃの王様

電話 ○四六・八五一・二七三〇

